

第9回日本臨床検査学教育学会学術大会
大会長講演

私が思うところの…『教育』『教育者』『教育施設』

山藤 賢

大会長講演

私が思うところの…『教育』『教育者』『教育施設』

山藤 賢*

〔Key Words〕日本臨床検査学教育協議会、日本臨床検査学教育学会学術大会、臨床検査技師教育、教育者、教育施設

はじめに

まずは、今回、大会長講演として、貴重なお時間を頂いたことに誠に感謝いたします。ありがとうございました。あくまでも私見にはなりますが、私が思うところの…ということで、この学会のテーマでもあります、臨床検査技師教育の歴史を紡ぎ、そして教育者としての在り方を考えるという部分で、お話しをさせていただきました。

1. 大きな理念の話

「教育」「教育者」「教育施設」と演題名にかけておりますが、この3つは、それぞれ独立してお話しをする必要もあれば、繋がった話をする必要もあります。またこれに「臨床検査技師」という言葉を組み合わせることも、我々の立場では必要であります。しかし、根本となる、医療人としての在り方に関して、まずは「大きな石の例え」を講演時にはお話しさせていただきました。壺にモノを入れるにあたり、小さな石に例えられる、知識や技術を入れていくのももちろん大事であるが、順序として先に、大きな石に例えられる、理念やコンセプトのようなものを入れておかないと、小

さい石で満たされた壺には、後からでは大きな石は入らないという例え話です。本大会長講演では、細部にわたる臨床検査技師教育の話に言及するのではなく、大きな意味での、「教育、教育者、教育施設の在り方」について、お話しをさせていただこうと試みました。そのあたりを踏まえつつ、本校の教育内容なども参考に紹介し、テーマを掘り下げさせていただきました。

まず、私の考えにはなりますが、教育とは何をすべきかと聞かれるたびに、今はその目的を、「一人で生きていく『知恵』と『力』を身につけさせること」そしてそれを、「共同生活の場である『社会』に還元すること」と答えています。臨床検査技師教育という部分をさらに強調するならば、それに加えて、医療人として「やさしい『心』をもつこと」と答えています。ですので、私が昭和医療技術専門学校(臨床検査技師教育に単科として携わる施設)の学校長の立場で答えるなら、この二つを合わせた、「一人で生きていく『知恵』と『力』を身につけさせることと、やさしい『心』をもつこと」が私の考える、「教育」です。

では、そのような「教育」を行う上での、「教

*昭和医療技術専門学校 sando@kj9.so-net.ne.jp

育施設」と「教育者」はどうあるべきなのか。これが、本学会で掲げたテーマとして皆さんと考えて共有していきたいことであります。当然、各教育施設はその成り立ちや特徴、役割はそれぞれ異なり、もちろん正解があるわけではありません。しかし、だからこそ常に私達が考え、勉強し、成長していかなくてはならないことであります。

2. 私の立場から

まずは、私の立場、経験からの視点として、なぜそのような考え方をするのかという説明をさせていただきます。あらためまして、私の立場ですが、現在、臨床検査技師教育施設の学校長としての立場の他、医療法人理事長として複数の医療機関を抱え、経営者の立場としての仕事もしています。また臨床の現場における現役の医師としての立場もあります。このことは、医療従事者を雇用する側の立場、送り出す教育者としての立場、一緒に現場で働く仲間としての立場、の3つの立場を意味しています。例えば雇用者としての立場で考えた時、何を重要視するのでしょうか。私共の法人の医療機関では、その採用面接などの際、一切学歴は問いません。その者が、どのような意欲で仕事に臨もうとしているのか、その人物の良さは何なのか、私共が掲げる「居心地のいい医療機関」を創造していくのにマッチしている人物か、を見定めています。医師としての立場で、現場で働く仲間として考えた際はどうでしょうか。やはり、コミュニケーション能力に長け、積極的で行動性のある医療従事者と働きたいと思うでしょう。そして、知識と技術を持って、共に物事を共有しつつ仕事をしていく仲間を欲しいと思うでしょう。学歴や偏った専門性だけを掲げ、挨拶の一つもできない臨床検査技師は、医療の現場では必要とされません。だからこそ、教育の現場に立ち返った際には、いつもその3つの視点に立って、私共の学校教育において「必要な教育」というものを考え、学生と向かい合い、学校教育に臨んでいるつもりであります。

私共の学校は3年制の専門学校であります。各校には各校の在り方があり、それは独自の教育理

念に基づいています。そこで、本講演では、各校がどう在るべきかではなく、私共の学校教育を例にあげつつ、医療人を育成する施設としての在り方をどう考えいくべきか。その根本的な在り方を、私の立場としての3つの視点を持って、教育施設における「必要な教育」を考えてみました。

3. なでしこジャパンとの共通点

私が、なでしこジャパン(サッカー日本女子代表)のチームドクターをしていた縁もあって、今回、なでしこジャパンの監督である佐々木則夫監督にも御講演いただくことができました。その世界一を取ったなでしこジャパンからも、教育者としてたくさん学ぶことはあります。そこには、個の教育と組織の教育というものがあります。佐々木監督はいつも選手に求めるものとして、「なでしこらしさ」というものを提唱しています。それは、「ひたむきであること」「芯が強いこと」「明るいこと」「礼儀正しいこと」の4つです。お気づきになられたかと思いますが、サッカーで世界一のチームであるにもかかわらず、サッカーに関すること、技術に関することなどは、何一つ入っていません。大事なものは、そのような「不変のコンセプト」なのです。これが冒頭に述べた、「大きな石の話」ということだと思います。臨床検査技師教育も、臨床検査技師という特化した内容以前に、医療人としてのあるべき姿やコンセプトが、教育の中でも「大きな石」として必要ではないかと思っています。

4. 必要とされる臨床検査技師の要素

臨床検査技師という名称の『臨床』とは、『現場』ということの意味をしています。そもそもの臨床検査技師の在り方を考えたとき、やはり、医療の現場から、そして医師から必要とされる臨床検査技師でなければ、その存在意義は見い出せないと思っています。もちろん、歴史も踏まえて、その業務の多様性や価値観からも考えて、色々な場面での臨床検査技師の必要性や可能性があることは重々承知しています。また今後はその役割は益々多様性を増し、重要性を増していくことでし

よう。その上でですが、やはり原点に帰って考えれば、それでも医療の現場で必要とされる人材、職種でなければ、そこに「医療従事者」としての価値は認められません。だからこそ、今、あらためて一番必要とされる臨床検査技師の要素は「人を思いやることができる心を持った医療人」と考えています。そして、現場で仕事をしていて、いつも「目がキラキラしている」元気で明るい医療人、誰からも必要とされるような医療人、そんな医療人としてチーム医療の中心を担ってほしいと思っています。

5. 現代はどのような社会なのか

それでは、教育をしていく上で、「学生を社会に還元していくこと」がその役割だとすると、まず社会に出ていくにあたり、いまはどのような社会なのかということも考えていかなければなりません。臨床検査技師といえども、一社会人であり、まずは、その社会を構成する一員として必要な要素から考えたいと思います。現代社会がどのような社会かということに関しては、決まった正解があるわけではないので、様々な意見があると思いますが、現代社会は「評価経済社会」であると言う経済学者¹⁾もいます。これはどういうことかと言いますと、個人としての評価が全てである時代ということであり、ちなみにその前の時代は「貨幣経済社会」と言われていて、お金がすべてという考え方の時代です。IT長者やお金が全てと言った発言なども多くあったことが思い出されます。その前が「学歴経済社会」であり、その前は「家柄経済社会」であったとされています。確かに、日本という国において、家柄が全てであるという考え方の時代、学歴が全てという考え方の時代はあったかと思えます。しかし、そのような考え方はかなり前のことでもあります。確かに学歴は今もその個人をはかる大事な要素の一つではありますが、しかし、昨今では、国内最高学府を出ようが、大学院を出ようが、就職すらできないという話をよく聞くようになりました。これこそは、学歴だけが全ての社会ではなくなっており、臨床検査技師も同様で、ある大学、大学院に進めばそ

れだけでその人は幸せになれるということではありません。あたりまえですが、資格と学歴があれば、現場から必要とされる臨床検査技師になれるというわけではないのです。結局はその人が「どう在るか」が全てであります。評価経済社会がどのような社会かという例に、たとえば、ツイッターなどでは、そのフォロワーは、お金を積みさえすれば増えるものではなく、そこに人が集うだけの、コミュニティーやキャラクターなど、その個人の魅力が必要となってくるということがあります。そこには、お金や学歴の影響が存在しない世界があるのです。それが現代社会の在り方であるということです。そのような社会においてはやはり、一人で生きていく力が必要になってくるのではないのでしょうか。大事ななのは、その人を構成する「外付けの要素」だけではなく、「中身として」人から必要とされる人物になるということでありましょう。そして、医療従事者は、真の医療人としてあるべき姿が求められるようになってくるのではないのでしょうか。

6. 医療体制の変革

また、今後はどのような医療体制がキーワードになってくるのであろうかということで、今までもチーム医療という概念の中での臨床検査技師の役割については、先人たちの努力もあり、実務としても前進してきています。大卒の話になりますが、私は、個人的には、少子高齢化が進む中、それぞれの地域に基づいた地域医療が必要となってくると以前より考えており、発信しています。個人、家族では支えられないものを、それぞれの地域が支えるような仕組みが必ず重要になってきます。国という単位ではとらえる規模として大きすぎ、個人や家族という単位としては負担が大きいと考えると、それぞれの地域のコミュニティーを中心に物事をとらえていく機会は増えてくると思われ、そのような、地域、現場でも必要とされるように、臨床検査技師もその形態、役割を考えつつ進めていくことが、未来を考えた時に大事なのではないかと個人的には考え、教育の場では実践の機会として取り組んでいます。

7. 本校の教育方針

臨床検査技師教育という概念において、私のような未熟な人間の立場で、全てがこうであるというような壮大な結論的な話は元来できるものではありません。せいぜい本校で行っていることをベースにお話することしかできませんので、そのあたりをご理解いただきつつ、講演時には、本校での教育内容に少し触れ、医療人としての根幹を成す大事なことについて論じさせていただきました。本校ではスローガンとして「全員卒業・全員合格」というものを掲げています。これは国家試験の合格を一つの目的としている教育施設ではありませんが、その目的が合格率の高さなのではなく、一人一人の学生を幸せにすることが目的であるという考え方から来ているスローガンです。そこに存在するのは、個人主義をよしとせず(個性はもちろん大事です)、同じ目的を持った仲間を大事にし、お互いが支え合いながら全員で合格を目指す姿です。幸い、昨年度の卒業生も、前年に引き続き、最終学年において、一人の留年者も出さずに全員が国家試験に合格することができました。なぜそのようなことを大事にしているのか。それは「自分さえよければいい」という人間は、人とその命に係わる医療従事者に向いていないと考えているからです。そのあたりの理由は、講演時には、一匹のサルから始まる、社会の成り立ちと教育の原点という話で、集団で生きるためのルールと、それを世代を超えて伝える教育について話しました。自分さえよければいいという個人主義、強い者だけがその享受を受ければいいというのは、そもそも教育には、なじまない考え方であるという事を伝えさせていただきました。だからこそ、私共の学校では、自分だけがよければいいということではなく、全員での合格を目指すことを教育の柱にしています。そして、自分だけではなく、他人を思いやれる人間でなければ、医療の仕事に就く資格はないと学生には日頃より伝えています。

8. 社会で生きていく力

とはいっても、社会に出てから、集団の中で輝

いていく個であるためには、自分自身も強くなければなりません。では入学した学生に3年間で何を求めていくか。ここでは簡単な話にとどめますが、私は心技体という言葉で、順序を変えて体技心とし、学校ではその中身を説いています。1年次は「体」にあたり、規律や基本的な体力(例えば毎日ちゃんと学校に来る、全ての授業に出席する、勉強する)から始まります。2年になれば、「技」が中心となり、技術(知識・技術・コミュニケーションスキルなど含む)を身につけるということを大事にしています。3年になったとき、そのような基礎的なベースがなければ「心」は伴いません。体・技あつての心と考えています。なぜ、このような流れが必要なのかとえば、私は医療従事者として大事な要素の一つあげるとすれば、体力だと考えているからです。例えば、どんなに知識や技術がある臨床検査技師でも、職場に来なければ何も意味はありません。そこに来るという体力、毎日仕事を続けられる体力、それは精神力も含めた上での、個人の力であります。入職してすぐに、社会の厳しさを理由に、自ら仕事自体を放棄したり、精神的な不安定さから、期待に応えることができないような若者も増えてきています。しかし、人の命をあずかる仕事である臨床検査技師という仕事は、自分のことのみならず、常に他人を思い、社会に貢献する必要があり、責任感が必要な仕事であります。そのことに誇りを感じ、自分自身を強く律することのできる能力も、身につけていかなければなりません。臨床検査技師教育という言葉の中には、そのような意味合いも含まれているというのが、私の考えであります。そして学校教育の中で、目に見える形の評価とは異なる部分ではありますが、身につけさせていきたい素養であると考えています。

9. 学生の本分

よく本校の教育方針に興味を持たれて、来校してくださる方々が多くいらっしゃいます。そこで、講演時には、朝の学生の挨拶の様子と、学校周辺の近所を自主的に掃除する学生の様子を動画映像で見させていただきました。本校では、学生の本分と

いうものを掲げ、入学すると、まず伝えられます。それは、出席、提出物、挨拶、ゴミ拾い、素直であること、の5つです。このようなことが当たり前のようにできるようになった学生達は、臨地実習先でも、学生だけ朝からちゃんと挨拶ができる、朝から職場の掃除をしていると、高い評価をいただいております。しかし、このようなことにも学校としての意図や仕組みはあります。朝は、事務課、教務課の前を通らなければ校内に入ることできません。そこで一人ずつが、教職員と挨拶を交わします。そうすると、その学生の様子が毎日手に取るようにわかります。入学当初はやらされている感じもありますが、すぐに自然なこととしてするようになり、知らない来校者や近所の方々も、いつも挨拶を自分からする学生達に感心してくれています。また掃除も、このようなことをしていると地域とコミュニティーが築けます。いつも近所のおばさん達が、その掃除をしている最中の学生達にパンや牛乳、ミカンなどを差し入れてくれます。これが、実は、社会と繋がるという大事な要素なのではないかと私は思っています。

10. 現場教育

昨今、臨床検査技師教育は大学教育、大学院教育を中心にシフトしている傾向にあります。それはそれで臨床検査技師教育の在り方として、とても大事なことです。しかし、3年制・4年制を問わず、それぞれの学校にはそれぞれの理念や特徴、それぞれの良さがあります。その中で、私共が学校として大事にしているのは、「どのような医療人になって欲しいのか」という前提を大事にしたうえで、その目的に向かった細分化された専門性であります。

医療現場の立場からは、臨床検査技師養成校の卒業生は、卒業してから現場での「即戦力」としての活躍を当然期待されています。そこに私共の学校でもう一つ、就職後も勉強と自己研鑽を積み重ねる向上心を持った「成長力」を持った社会人を送り出したいと考えています。そのような「即戦力」と「成長力」とを合わせて「現場力」

と名付け、本校においては「現場力」の高い臨床検査技師を生むべく教育内容に力を注いでいるのが特徴であります。例えば、本校においては臨地実習は6ヵ月間行っています。これは昨今では実習期間の短縮傾向にある中、現在、全国でも最も長い実習期間を設けている学校の一つであります。もちろん、ただ長いことがいいと言うわけではありません。しかし、臨地実習というものは、元来、各校が「国が定めた最低限の期間をクリアする」ことを目的にやるものではないでしょう。本校では「現場力」を高めるために、それだけの医療現場での学生時代の生きた経験が必要と考え、現場の臨床検査技師の先生方の協力を仰ぎ、未来を担う臨床検査技師の育成に共に力を注いでいるのです。

大切なのは、現段階(の臨床検査技師教育の規定)においては、各校がそれぞれの目的を持ち、その物事の期間や内容、「在り方」を考えるとということにあるのではないかと思っています。

また、現場力を身につけるにあたり、学内での取り組みの一部を講演時には紹介いたしました。それには3つの要素があります。1：技術力の向上、2：日本語力の向上、3：現場に出てからの成長力、です。

技術力の向上ですが、これには、6ヵ月に及ぶ臨地実習や、OSCE(Objective Structured Clinical Examination；客観的臨床能力試験、通称オスキー)などが試みとして当てはまります。

日本語力の向上ですが、これは、確かにグローバル化の波の中、英語教育は大事であります。それより以前に日本語でさえきちんとしたコミュニケーションをとれていないのが現状だと思います。そこで本校では、日本語教育に重きをおき、昨年度から第2学年にもその講座を増やしました。詳細は以前にも本学会で報告しておりますが、これは国語の授業をしているのではなく、表現やコミュニケーションスキルも含めた講座となっています。

また成長力に関してですが、医療人特論という講座や、人間学、生命の倫理、ディズニーでの研修、就職セミナーなどを通して、働くこととはな

にか、自分は何者か、人として生きる根底として大事な素養を育んでいます。医療人特論に関しては、本学会内でも別に演題発表をし、フロアーからも沢山の議論や共感をいただくことができました。ありがとうございました。

また学生時代より大事にしている心の絆を高めるような教育であります。卒業生にも継続して応用しております。卒後に、リーダーシップ研修と称して、卒後教育も学校で担っております。

11. 本校の特徴的なイベントなど

講演時には、本校の特徴的なイベントの一つである、卒業式での、一人一人の卒業スピーチの映像も見いただきました。謝恩会における学生からのプレゼント映像の全員卒業・全員合格のDVDアルバムと合わせて、後ほど多くの先生方から、感動したとのコメントをいただきました。このような映像を見ると、あらためて私達はやはり教育の現場で働くことを、大変だけど、やりがいがある、喜びのある素晴らしい仕事であると感じることが出来ます。その一瞬の喜びのために我々は日々、学生と向かい合っているのかもしれない。学校としては、学生達が最後に全員笑顔で卒業していけること。これに勝る喜びはありません。これからも、もっともっと、学生達が、臨床検査技師になれてよかった。この学校に来てよかったと言ってもらえるよう努力していきたいと思っています。

12. 良い教育施設とは

学校教育などについて触れてきましたが、では、あらためて良い教育施設とはなんだろうということをお話しします。良い施設と言っても、ここでは、施設が広いとか、設備がいいとか、そういうことを述べるではありません。組織論のお話をします。施設ということは、それはすなわち組織ということを示します。そこで、私は経営者でもありますので、仕事をしていて良い組織とはなんだろうということをお話しします。教育施設も組織です。講演時には、この3つがあるといい組織なのではと、思っていることを述べました。

1) 皆が同じ方向を向いている

これは、みんながそっぽを向いていて好き勝手にやっていると、それは組織として機能していませんから、当然のことです。ある程度、同じ流れにのっている必要はあります。

2) 責任をとる誰かが明確である

何かあったときに、誰が責任をとるのか、誰がそれを最終的に決めているのか、それがはっきりしていない組織は、船頭がいないようなものですから、これもいい組織とは言えないと思います、でも結構こういう組織も少なくないのではと思っています。

3) 仲間である

そこで働いている人間が、みな仲間であるかということです。個人的な好き嫌いは人間ですからあっても当たり前ですし、趣味も趣向も違って当然です。でも一緒に働く人間の足をひっぱったり、けなしたりしては、それは仲間ではありません。一緒に働く人間たちは、やはり仲間であり、いざという時に助け合う関係でなければいけません。

皆さんの施設はいかがでしょう。皆が同じ方向を向いていて、明確に責任を取れる信頼あるリーダーがいて、そして働く職員が、皆、仲間でありますでしょうか。この3つに思いきりうなずけるでしょうか。私は、こうありたいと思っています。そして、学生は、そういう組織でない、どこを向いていいかわからなくなります。教員によって言うことが違う、誰に聞いていいかわからない、雰囲気ギスギスしている。そのような学校では学生も困ります。学生のためにも、いい組織、いい施設を常に考えて行動していきたいと思っています。

13. 自由と規律について

私の愛読書の一つである、「自由と規律」²⁾という本に「自由と放縦の違い」という一文があります。私達が教育に携わっていると、よく学生の自由とか権利とかいう言葉がでできます。でも、そこには規律やルールとの線引きが必要です。放縦とは辞書で引くと、「何の節度もなく気ままにふ

るまうこと」とあります。では自由と放縦の違いは何なのか。自由には、そこに規律、ルールがあります。でも、だからこそ、その中で、学生には物を言う権利があります。そして規律を与える側には、今度はそこに説明と納得をさせるだけの責任が必要となります。ですから、勇気と責任を伴うのです。だからこそ自由なのです。

昨今は、医療に限らず、色々な教育の現場で、よく学生の自由にさせているので…、と放置するような姿勢が見受けられたりします。でもそれは、誰にでもできることであり、それならば教育者は必要ありません。だから、その言葉も、考えも私は個人的には好きではありません。それは自由ではなく放縦なだけです。自由にはルールや厳しさがそこには、必ずあるべきであります。例えば本校は非常にあたたかい雰囲気がある学校です。でも厳しい学校でもあります。挨拶などにもうるさいです。でもそれには、信念があります。愛情があります。ゆずれない思いがあります。ルールがあるなかでの自由という考え方があります。

医療の現場では患者様の命を預かっています。そこには、規律やルールを守ることが絶対に必要です。ですから、学生の放縦を許すのは簡単ですが、それを自由を与えているという言い訳にして、教員がなにもしないのは、無責任な話しであると思っています。学校教育においても、愛情と厳しさが必要で、そして勇気と責任をもった自由が学生に与えられる権利ではないかと思っています。それこそが我々が目指すべき教育というものではないかと思っています。

14. 教育者としての在り方

教育者の在り方として、私が好きな言葉で、いつも講演で使っているウィリアムウォードの言葉を講演時に紹介しました。

「平凡な教師は言って聞かせる。よい教師は説明する。優秀な教師はやってみせる。しかし、最高の教師は…、子供の心に火をつける。」というものです。

結局やるのは我々ではなく、学生自身、考えるのも学生自身です。我々教育者は、そこにどう火

をつけていくのか、自ら動いていける医療人をどう育成していくのか、我々も考え、自ら動き続けなければならないと思っています。

15. 医療と教育

社会的共通資本³⁾という考えがあります。宇沢弘文先生(1928-2014; 経済学者)は、その書の中で、制度主義のもとでは希少資源は社会的共通資本と私的資本との二つに分類され、社会的共通資本とは、わかりやすく言えば、これがないと人間が共同で生きてはいけないというものであるとのことを述べています。内田 樹先生(1950-; 哲学研究者)はその講演の中で、この社会的共通資本はその性質から、あまり急に変化するの望ましくないものと述べていました。だからこそ、急激に変化する政治とかマーケットをできるだけ排除すべきとの見解でした。私達にかかわるのは、医療と教育の話です。制度資本の中にこの医療と教育は入っています。では、どれくらいが急ではないということなのか、おおよそ人間の生きる寿命の範囲くらいだそうです。なぜならそうでないと生身の自分が追い付かないからです。教育もその原点は実は100年くらいかけて変わってはならず、夏目漱石の坊ちゃんのところから先生の性質は変わっていないはずとのことです。なのに、市場原理、グローバル化という名目のもとに、形式的な変化を追い求め、実がついていない状態です。その結果、現在、医療と教育が崩壊状態と言われています。

医療と教育、この二つは実はメンタリティーが似ています。根本を思い出しただきたいと思うのですが、この二つは社会的弱者を救うためにあったはずで、医療は、弱っている人間に寄り添って立つ。教育は、無知な人、これから学びたい人の横に立つ。どちらも弱い人間のかたわらに立つ仕事であるということです。

弱い人間を排除していい仕組み、強者がその享受を受ける仕組みの医療、教育は、そもそもその原点からして、社会に『なじまないはず』であります。なぜなら、それこそが我々が生きている「共同生活」だからであります。教育とは決して

ビジネスではありません。私は例えばいい大学・大学院に行けさえすれば、それがいい検査技師になるとはイコールではないと思っています。もちろん同様に短大・専門学校に行けば、いい検査技師になれるものでもありません。学ぶとは何なのか、学校教育の中で、私たちはそれを実践したいと思っています。学生に一人で生きる『知恵』と『一人で生きる力』をつけてあげたいと思っています。『真の心のやさしさ』を持ってもらいたいと思っています。そしてそれは、さきほど述べた現在の評価主義社会の中では、もはや貨幣価値でも学歴でもない、個人としての評価であります。

16. 教育とは

ではあらためて、教育とはなんでありましょう。一見、教育というと、何かを与える、何かを施すことかと我々はいっしょに思ってしまう。だから、例えば体罰問題なんかも、教育という名のもとに行われる正当なもの、などのような話になってしまうことがあります。でもそれは勘違いであり、間違った考えだと思っています。Education という言葉は、そもそもそのような「与える」という意味を持ちません。その語源は、ラテン語の「引き出す」という意味からきているそうです。学生が本来持っている良いもの、備わっているもの、それを引き出してあげることが、本来の教育です。そしてそれが教育者の役目であり、教育施設の役割であるはずで

17. ま と め

我々医療従事者は、白衣を着たその日から、患者様から見れば、一年目も十年目もない、ただの一医療従事者としてしか見られません。その中で必要な「即戦力」という要素は、知識や技術のみならず、その医療人としての振る舞いや在り方の部分が一番大切であると考えています。我々が考える、将来にわたって必要とされる臨床検査技師としての在り方は、そのような「人間力」を身につけた、そしてこの社会で「一人で生きていく強さ」と「心のやさしさ」を兼ね備えた医療人であり、そのような考えは、あまりにも根本的で、

医療の発展やグローバル化という名の元に行われている改変の波とは垂直であるかもしれませんが。そのため、私が紹介したような、本校の教育で大切にしていることは、一見すると「古い」考えとやり方のように見えるかもしれませんが、本当は医療界・教育界において忘れてはならない根本となる大事なことであり、その実行は反って「新しい」ことでさえあるかもしれないと考えています。

「教育」「教育者」「教育施設」その考え方は、人それぞれ、施設ごとそれぞれで当然であります。画一的な正解があるわけではなく、だからこそ、何かを人に押し付けたり否定したりするのではなく、それぞれの教育者・施設が自分達の価値観で作りに上げていかななくてはなりません。

私は、大事なことは、各養成校がそれぞれの独自の理念や教育方針を掲げて、その役割を全うすることであると思っています。そして教育者一人一人が、そのことに対し信念と誇りを持ち、学び、変革し続けることが必要です。

私はそのようなことを「旗を掲げる」という表現でいつもお話しさせていただいており、講演時にもそのスライドで締めさせていただきます。教育機関とは旗を掲げることであり私は思っています。本校を例にあげれば、本校は3年制の専門学校です。そして私学であります。でも、だからこそ、我々の信じる、掲げる教育ができると信じています。教育の原点とは、本来、個人が作った持ち出しの事業であります。だから、我々は、我々の旗を掲げています。3年制、4年生、大学院、それぞれの学校にそれぞれの多様性、役割があると思います。だからこそ、それぞれの教育機関が旗を掲げなければなりません。我々はこんな教育をしているんだ、こういう学校なんだ、という強烈な自己意識を持っていなければなりません。それには信念、哲学、努力、面倒くさいことがたくさん大変な作業であります。でもそれに賛同する人達がそこに集います。そして、我々はそれに対し、ゆずらない信念、プライド、責任を持ってそれに答えるべきであります。意地を張ってでも、それぞれがそこをゆずらず、その旗を掲げ続

けるべきであると思うのです。

そして、我々教員一人一人も、その旗を掲げるべきでありましょう。なぜ、自分は教育に関わっているのか、自分は何がしたいのか、何のためにしたいのか…。

我々、協議会も、組織として旗を掲げて進んでいかなければなりません。お互いの利害関係だけでなく、組織として、「臨床検査技師とは何を持って臨床検査技師たる存在なのか」、「臨床検査技師教育とは何なのか」、大きな理念と行動を持ってすすんでいかなければなりません。

なぜならば、それが、臨床検査技師教育にたずさわる、我々の使命だからです。

【謝辞】

今回、たくさんの先生方、学生達に御参加いただき、大会は過去最高の参加者数となり、大盛況となりました。皆さまに心より感謝申し上げます。また、学会終了後も、本校への、メールやお手紙で、学会に参加してよかったというお礼状や、感動した、共感することがたくさんあったなどの感想、感謝の言葉をたくさんいただきました。その

ようなメールが学会終了後2週間ほど、連日のように届き、いままでこのような経験はなかったので、大変驚くと同時に、本当にあたたかい皆様によって支えられた大会だったのだなど、あらためて感謝の気持ちと感動をいたしました。これからも、微力ながらも、私も本校も今後の協議会のますますの発展に協力できればと思っております。

最後に、大変お忙しい中、司会を務めてくださり、3日間を通して学会を支えてくださった理事長の戸塚 実先生、私を大会長にご推薦くださり、共に学会を楽しんでくださった前理事長の三村邦裕先生、そして、演者の方々、参加してくださった全ての方々、関係者の皆様方、運営に関わった本校・本法人のスタッフ、昭和医療技術専門学校の学生たち、皆様に心より感謝いたします。本当に最高の3日間でした。ありがとうございました。

文 献

- 1) 岡田斗司夫. 評価経済社会. ダイアモンド社 2011.2
- 2) 池田 潔. 自由と規律—イギリスの学校生活. 岩波新書 1963.6
- 3) 宇沢弘文. 社会的共通資本. 岩波新書 2000.11